

## 論文の内容の要旨

### ウズベキスタンにおける慣習経済の機能と役割 - アンディジャン州におけるマハッラの共同体像と社会的紐帯 -

樋渡雅人

#### 1. 論文の目的

本論文の課題は、旧ソ連中央アジアの市場移行国であるウズベキスタンを対象とし、移行期の経済的苦境の中で「慣習経済」の担ってきた積極的な機能を明らかにし、基盤となる構造を共同体の実態調査を通して検討することである。ここで慣習経済とは、主体間が血縁・地縁等の社会的紐帯や慣行ルール等を介して相互に依存し合っている経済である。以下では、慣習経済に対する本論文の分析視角を、「社会保障機能」と「共同体」の観点から説明する。

第一に、本論文の着目する慣習経済の積極的な機能とは、インフォーマルな社会保障機能に他ならない。近年のウズベキスタンは、市場や政府が不十分にしか機能しないという移行期特有の危機的状況を経験してきた。同地域の社会人類学的研究においては、日々の経済的困難を凌ぐためのセイフティネットとして、血縁・地縁等の社会的紐帯に基づいた互酬ネットワークが注目されている。本論文では、互酬ネットワークを家計調査の個票データから定量的に把握することで、発生要因の分析を行う。互酬ネットワークの社会保障機能を明らかにすることによって、慣習経済に積極的な機能が内在していることを示した

い。

第二に、慣習経済の基盤構造を、共同体の事例分析を通して検討する。ウズベキスタンの地域共同体は、「マハツラ」と呼ばれる。本来、マハツラとは、イスラーム圏の諸国における都市生活の基本的な単位であった。近年、同国政府は、マハツラの復興を標榜し、これを政策に取り込むことによって開発を進めようとしている。本論文では、アンディジャン州のマハツラにおける実地調査を通じて収集した一次資料に基づいて、マハツラの事例分析を行う。すなわち、マハツラにおいて、どのような性格の社会的紐帯が、どのように張り巡らされているのかを分析することを通して、マハツラの共同体像を検証する。最終的には、慣習経済の基盤構造の観点から政策的含意を引き出したい。

## 2 . 各章の構成

以下に、本論文の第一章以降の構成と主要な論点を示す。

第一章の目的は、近年のウズベキスタンの経済社会的状況を概観した上で、慣習経済の社会保障機能を分析することによって、マクロ的視野から同国における慣習経済の位置付けを示すことであった。ウズベキスタンは、独立以来、経済改革の漸進主義を掲げて政府主導の民営化を進めてきたが、経済・制度変革は難航し、他の移行国と同様に、長期的な経済不振や公的サービスの低下を経験してきた。第二節以降では、経済的苦境の時期に、互酬ネットワークの担ってきた社会保障機能を分析することを通して、慣習経済の積極面を検証しようと試みた。具体的には、互酬ネットワークを定量的に把握するために、家計間の現金財貨の移転授受、すなわち、プライベート・トランスファー（私的資源移転）に着目した。経済の最も落ち込んだ時期である 1995 年に同国で実施された 1500 世帯余りの家計調査の個票データを用いて、プライベート・トランスファーの規模と概要を定量的に確認し、その社会保障機能の計量分析を行った。推計結果からは、この時期の同国のプライベート・トランスファーが、一時的な所得ショックを補填する所得再分配機能を担っていたことが認められた。さらに、親族間移転と隣人間移転に焦点を当てた拡張的な分析からは、血縁・地縁的紐帯の重要性が示唆された。

第二章においては、次章以降の共同体の実態調査に備えて、同国におけるマハツラの歴史的、政治的背景や、マハツラと共同体を扱った諸議論を展望し、分析視角を明確にした。最終的には、「下からの」構造分析と名付けた次章以降のマハツラ分析には、以下のような 3 つのねらいがあることを示した。

第一のねらいは、慣習経済の社会保障機能はどこから生まれるのか、その構造を具体的現実に照らして検証するために、マハッラにおける相互扶助のありようを示すことである。そこには、第一章の計量分析によっては十分に接近できなかった慣習経済の具体構造を検証しようという意図があった。第二のねらいは、「下からの」観点、すなわち、単に行政の末端組織としてではなく、住民の視点からマハッラの共同体像を示すことである。この点は、近年のマハッラを巡る諸議論における空隙を埋めることを意味していた。

第三のねらいは、マハッラを事例に、従来の開発政策議論が暗黙裡に想定してきた「機能的共同体像」とは異なる共同体のありかたを示すことである。機能的共同体像とは、「明確な境界線（厳格なメンバーシップ、小規模、排他性）」と「構成員の同質性」に象徴される一枚岩的な共同体像であった。第四節では、政治経済学、開発経済学で扱われてきた共同体論を振り返り、背景には、共有資源（Common Property Resource）の管理等、明確な共同利害を介して、共同体の全構成員が互いに結ばれていると考える機能的共同体観があったことを指摘した。他方で、マハッラ等を扱ってきたイスラーム研究においては、その共同体像の特徴として、「滑らかな境界線」や「構成員の異質性」といった諸点がしばしば強調されてきた。以上を比較しつつ、本節では、実際の共同体に対して機能的共同体像を安易に適用することは、内部に存在する様々な社会集団や利害関係の絡み合いを見落とすことにつながると指摘し、共同体を一枚岩に捉えずに、微視的に分析する必要性を主張した。

第三章では、前章に示した問題意識に基づき、実際に、アンディジャン州のマハッラを事例分析した。調査地である「オフトバチェック・マハッラ」において実施した家計調査、親族関係調査、ライフヒストリー調査等によって得られた一次資料を駆使し、マハッラの共同体像を提示することを最終的な目標とした。

200年余りの歴史を有するオフトバチェック・マハッラは、現在までに500世帯程度まで膨張してきたが、内部には様々な社会的紐帯が錯綜し、機能的共同体の枠組みには合致し難い外観を呈していた。第三節以降では、マハッラ内部の住民の視点に立ち、個人や世帯の保有する社会的紐帯に着目した。マハッラにおいて際立った存在感を示している血縁や慣習「ギャブ」の性質と普及の実態を分析することで、これらの社会的紐帯が、明確な共同利害を有した機能的紐帯であるということを示した。機能的紐帯によって形成されたネットワークは、メンバーシップを厳格に固定しているという点で、外に対しては閉鎖的であった。ただし、同時に以下の2つの特徴を伴っていた。第一に、「重層性」である。各世帯が複数の機能的紐帯のネットワークに所属することは容認されていた。つまり、マハッラ

という領域における緊密な人間関係は、これらのネットワークが、互いに溶解や融合するのではなく、幾重にも重なり合うことによって醸成されてきたとみなせた。住民間の相互扶助は、これらのネットワークの網の目を通して行われており、インフォーマルな社会保障としてのマハッラの意義とは、機能的紐帯によるネットワークを濃密かつ重層的に根付かせている場であるという点にこそ存在していた。第二に、「横断性」である。これらの機能的紐帯は、必ずしもマハッラ内で完結していなかった。この点は、場としてのマハッラの境界線が、明確に線引きされないことを説明し、マハッラの構成員同士の異質性を一層際立たせるものであった。機能的紐帯の密に重なり合った場としてのマハッラは、その構造上、「曖昧な境界線」と「異質な構成員」を伴うものであったが、それは、相互扶助の基盤としての1つの共同体のありかたであった。

第四章の目的は、前章において提示したオフトバチェック・マハッラの共同体像を、相互に関連する3つの視角（有力者、家族儀礼、政策）から再検討することによって、共同体像を補完するとともに、その意味や含意について考察を加えることであった。

第一節においては、マハッラの有力者達に着目した。代表機関としてのマハッラ委員会の末端に至るまでの人事構成を詳しく検証することによって、前章で示した共同体像の中で、マハッラ委員会はどのように位置付けられるのかを示した。有力者達は、機能的紐帯によるネットワークの代表者であるという点で、互いに異質な利害集団に属しているという特徴があった。

第二節においては、トイ（家族儀礼）の過程等を参考に、マハッラにおける異質な有力者同士、異質なネットワーク同士の関係性を検討した。有力者同士は、直接的に強い機能的紐帯で結ばれていなくとも、「交点」としての個々の住民を仲介にして結ばれている側面があった。「交点」となる住民は、不定期かつ頻繁に異質なネットワークの参集の場を提供する。つまり、マハッラにおいては、機能的紐帯によるネットワークの重層性という基本構造の上において、「交点」としての個々の働きかけやトイ等の慣習を通して、異質な者同士の頻繁な接触や擦り合わせが生じているとみなすことができた。

第三節においては、近年のマハッラ政策を再考し、本論文の分析結果の含意を考察した。第一に、個々の観点からは、個人や世帯をネットワークの中で捉えることが重要であることを指摘した。ネットワークに漏れている世帯は、ネットワークの閉鎖性から、マハッラ委員会によっても救済されない可能性があることに言及した。第二に、現在のウズベキスタンの政策は、大きな方向性としては、機能的共同体像を育成することを目指しており、

現状の機能的紐帯の重層構造とは、いくつかの点で競合すると考えられることを指摘した。最後に、マハツラ政策には 2 つの方向性、すなわち、機能的共同体の育成を目指す道と、本論文の示した共同体像を活用する道があることを示し、マハツラによって使い分けることが、既存資源の有効利用につながることを指摘した。